

論題	漁村における麻糸撚りの技術
著者	加賀ひろ子
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— (神奈川県立博物館研究報告) 第2号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1969 年 (昭和 44 年) 3 月
判型	JIS-B5 (182mm × 257mm)

漁村における麻糸撚りの技術

A Study on the Technique of *Asaito yori* in Japanese Fishing Village.

加 賀 ひ ろ 子
Hiroko Kaga

1

ここに麻糸撚りの技術をとりあげ、民具と伝承資料からの技術史構成への1つの試みとしたい。

従来民俗学と技術史研究の関連の重要性が指摘されていながら、その研究は少ない。技術は用具、その使用法、製作法、目的、効果など種々の要素からなる1つの体系としてとらえなければならない。そのためには遺物や文献からの断片的資料では不充分である。というよりは、それらの断片的資料を関連づけて技術史として構成するには伝承資料が有効性を持つであろうと思うからである。

麻糸撚りのうち、とくに漁村における網糸、釣糸の製作をとりあげたのは、従来報告や研究がみられないこと、および漁村では近年まで麻糸を使用していたため現時点でもその作業過程や方法をかなり具体的にとらえることが可能であろうとの予測とによっている。

以下神奈川県下の5つの事例を中心にみていきたい。

2

事例報告に入る前に、網糸、釣糸の製作行程について、一般的な形を示しておく。

- ①麻（オ・長さ2m位）を購入し、手でもんでカスを取り去る。
- ②ぬるま湯につけてよくもむ。
- ③乾かす——湯から出して畳にたたきつけるようにしてひろげる。
- ④細くさく——根元の部分を口にくわえて取り除いてから、必要な太さに応じてさいていく。
- ⑤うむ——さいた麻を親指と人差指で撚り合わせながら長くつなぐ。
- ⑥シタヨリ——うんだ糸を紡錘車や紡車を使って撚る（単糸・片撚）。
- ⑦ウワヨリ——シタヨリした糸2本または3本を撚り合わせる（複糸・諸撚）。
- ⑧網をすくう——アバリとヘラで網に編む。
- ⑨渋をかけて、乾かす。

このうち⑤までは女の仕事で⑥以降は漁師が行なう。

一般に「糸を紡ぐ」という場合には⑤うむと⑥⑦「撚る」の両方の作業をさしている。

ゑうむゑ は女の仕事で指によって行なうことは各地共通である。そこで、ここでは ゑ撚るゑ について報告する。

各地域別に

1. 麻糸から綿糸へ変った時期
2. 撚り具の種類、人数、作業場所
3. 撚り方（2本撚り）の作業行程——シタヨリとウワヨリ
4. 3本撚り糸使用の有無と撚り方行程
5. 地域の概況、その他

の順に記す。3、4については図1～4参照。

用具は名称が地域により異なるので、次のように名称を統一して使用する。

ツム……上部に鉤のついた軸棒に木製のはずみ車をつけたもの。写真10—1～4

紡車……2種類あり、写真8をA型、写真9をB型とする。ツムが付属する。

ガラ……竹製糸巻き。写真5

ギッチョ……竹製、写真7

〔事例1〕 逗子市小坪 伝承者64才

1. 伝承者10才頃まで麻糸がさかんに使われた。以後次第に木綿に変わった。
2. (1)ツム……撚る糸の太さにより異なるので重さの違うツムを何本も持っていた。ツムは店で購入したが、以前はコマを利用して自製した。1人・室内。
(2)ギッチョ……1人・室内。
(3)紡車A型……使ったのはごく1部の人で、ツムを使った人が多い。
3. ①舟の櫓を右膝脇におき、その上にツムを鉤が左側になるように置く。
②鉤に糸をかけ、ツムの軸棒（鉤のついていない側）を木片（呼称不明、 $20 \times 5 \times 2\text{ cm}$ 位）で手前にこするようにして回転させる。
③鉤についている糸を右手で高く持ち上げる。ツムは回転を続け、ツムと右手との間の糸に撚りがかかる（図1—2）。
④ツムの軸棒（鉤のついた側）に撚った糸を巻きとる。ここまでがシタヨリ。
⑤①～④を繰り返して、糸を巻きとったツムを何本も用意する。
⑥ツムに巻いてある糸をガラに巻きかえる。まず竹筒を縁側などにおき、左足の指でしっかり固定しておく。その竹筒の中にツムを差し込んで、ツムが自由に回転できるようにしてから糸を繰り出し、ガラに巻きとる。
⑦ガラから2本の糸を引き出してツムの鉤にかけ①～④と同様して2本を撚り合わせる（図2—1）。このウワヨリに使うツムはシタヨリの時より重いもので、撚る方向は逆にする。
⑧⑤と同様、竹筒を使ってツムから糸枠へ糸を巻きとる。
4. 3本撚りの糸は、ナカ樽（延縄の継ぎ目につけ、縄が流されたときの目安にする）や、スバル（海底に沈んだ延縄を探して、引き上げる道具）につける時など特に丈夫さが要求される所だけに使用する。普通は2本撚りの糸。

ギッチョを使用する。

- ①シタヨリした糸をギッチョに巻いておく。
 - ②2本撚りにした糸を部屋の柱2本にめぐらして輪にする(図4-3)。
 - ③右手でギッチョをもち、手のひらで回転させながら、2本撚りの糸に巻きつけていく。「3、4回からげたら糸をひいて強く締める」を繰り返す。
 - ④輪にした糸全部に巻きつけたら、輪をほどきまた輪をつくって繰り返す。
5. 小坪は純漁村で、釣、延縄、網とそれぞれ専門にわかれている。伝承者は延縄専門。

〔事例2〕 三浦市諸磯 伝承者76才

1. 伝承者20才の頃、木綿が使われ始めた。
2. (1)ツム……1人・室内。
(2)紡車A型……2人・屋外。
3. (1)ツムの場合
 - ①事例1と同様櫓を台にして木片でツムを回転させる(図1-1)。
 - ②ツムを吊り下げる形(図1-2②)をとらず①を繰り返して、少しずつ糸を撚る。
 - ③ツムの軸に糸を巻きとる。
 - ④ツムからガラに糸を巻きとる。まず左手の親指と人差指で輪をつくりその輪の中でツムを支え立てる。ツムから糸を引き出し端をガラの竹筒に巻きつける。次にガラの竹筒の端につけたひもを回転させながら糸を巻きとる。
 - ⑤ガラから糸2本を引き出し撚り合わせる。シタヨリのツムとウワヨリのツムは同じものを使用する。
- (2)紡車A型の場合
 - ①紡車の上部についているツム2本に各々糸を結びつけ、糸端は箱にたぐり入れておく。
 - ②1人が紡車を回転させる。もう1人は糸を入れた箱を首から下げて糸が撚れるにつれ後退する(図3-2)。
 - ③適当な長さまでシタヨリができれば、ツムの各々に結んである2本の糸を1本のツムに一緒にする。
 - ④紡車を逆転させて2本を撚り合わせる。もう1人は糸調子をみる役目になって、2本がうまく撚り合うよう指で加減しながら後退する。
 - ⑤ウワヨリが終わったらツムから糸をはずし、もう片端は切る。その切口をまた紡車のツムに結び①~④を繰り返す。
4. 3本撚りの糸は使用しない。
ギッチョについての伝承なし。
5. 半農半漁の地で、伝承者も畑仕事の合間にエビ網をした程度である。

〔事例3〕 大磯町南下町 伝承者80才

1. 大正中頃までは麻糸を専ら使用した。
2. (1)ツム……1人・室内。

(2)紡車A型……ツム（ツメと呼ぶ）が2本のものと、3本のものの2種類。ガラと呼ぶ。3人・屋外。

(3)ギッチョ……1人・屋内外。

3. (1)ツムの場合

①～⑤シタヨリは事例1と同じ（図1—2）。

⑥ウワヨリのために2本の糸を引き出す。事例1、2のようにガラを使わず、竹筒2本に各々ツムを差し込み、ツムから直接糸を引き出して撚り合わせる（図2—2）。この時はツム3本を必要とする。糸巻きのガラについての伝承はなく紡車をガラとよんでいる。

(2)紡車A型・1台使用の場合

事例2と同じ（図3—2）。

(3)紡車A型・2台使用の場合

①紡車2台を適当な距離をおいて置き、ウワヨリ用の紡車にはレールをつけて、2台の間の距離の調節が可能にしておく。

②事例2と同様、箱（ゼニバコ）に糸を入れ、首から下げて後退しながらシタヨリをする。

③シタヨリが終わったら、糸端を切って2本一緒にもう1台の紡車のツメに結びつける。

④2台一緒に（方向は逆）に回転させて撚り合わせる。次第に糸が短くなるので、紡車をレールの上で移動させながら行なう。もう1人が2台の紡車の間で糸調子を加減する。

4. (1)ギッチョの場合

事例1と同様（図4—3）。

(2)紡車A型（3本ツム）の場合

3—(3)と同じく、紡車2台を使う。ただしシタヨリのための紡車に3本ツメを使い、3本一度に撚り合わせる。2本撚りにくらべ糸調子の加減がさらに重要で、木または竹のナコウドとよぶ用具を使う。

5. 純漁村で延縄と一本釣が中心。

〔事例4〕 小田原市本町 伝承者60才

1. 大正中期にマグロ延縄にはじめて綿糸を使った。それ以後も化繊を使うまでは綿と麻を併用していた。

2. (1)ツム……マイツム（図10—2）1本とシリツム（図10—1）2本の計3本で1組となる。糸の太さにより重さの異なる組合を何組も持っていた。ツムははずみ車の部分を木地師に作らせ、鍛冶屋で軸棒を通して作った。3人・屋外。

(2)紡車A型……ツムが2本ついたハナグルマとツム1本のシリグルマの2台で1組。伝承者12、3才の頃から使いはじめた。ガラと呼ぶ。3人・屋外。

(3)ギッチョ……1人・屋内外

3. (1)ツムの場合——≒3本ツム≒と呼ぶ

- ①机などを台に、ツムの軸棒を手でこすって回転させながら、これから撚る糸をマエツムに巻きつけておく。
 - ②浜に竹で台（座って頭のつかえない高さ）を2つ（10～15間の間隔）作り、一方にマエツム2本を吊り下げ1人があぐらをかいて座り、もう一方にシリツムを吊り下げてやはりその前に1人座る（図4-1）。残る1人は2人の中間にいて糸の撚り具合をみながらツムをまわす2人に合図して作業を進めていく。
 - ③まず両手で軸棒をはさんでマエツム2本を交互に回転させ、常に2本のツムが回転するようにして2本の糸にシタヨリをかける。
 - ④③をうけて、シリツムを回転させ2本の糸を撚り合わせる。
 - ⑤マエツムの方では巻いてあった糸を引き出し、シリツムの方では出来た糸を軸に巻きとる。
 - ⑥②～⑤を繰り返す、マエツムの糸を全部シリツムに巻きとる。
- (2)紡車A型の場合
- ①シタヨリはハナグルマを使用して事例1と同様にする（図3-2）。
 - ②ウワヨリにはハナグルマ、シリグルマの2台を使い、方法は事例3と同じ。ここでは間にいて糸調子をみる人をナコウドと呼び、竹の棒、割箸、指などを使う。
4. ギッチョを使用する
- 方法は事例1と同じ（図4-3）。浜に竹の棒2本を立てて行なう。
5. 小田原は県内漁業の先進地。伝承者は一本釣と延縄を専門としている。

〔事例5〕 横浜市子安 伝承者72才

1. 伝承者20才の頃から綿糸が使われ始めた。
- 2.(1)紡車B型……写真9の右下の輪の部分にツムをはめる。このツムはテツムや紡車A型のツムと異なり鉤のない形である。1人・室内
ツムや紡車A型についての伝承はない。
3. ①紡車のツムのはずみ車の部分にヨシを7～10cm位に切ってはめ、糸端を巻きつける。
ツムはヨシの太さに合わせて、いろいろな大きさのものを用意しておく。
- ②左手の人差指と親指で糸を支え持ち、右手で紡車をまわして撚る（図3-1）。この時左手を上下に動かすことで糸の撚り具合を加減する。
- ③こうしてシタヨリした糸がいっぱい巻きついたヨシを何本も用意する。
- ④ヨシからガラに糸を巻きとる。まずもう1人にツムを持たせ、糸の巻いてあるヨシをツムのはずみ車にはめる。このヨシから糸を引き出してガラの竹筒に巻く。この時だけ2人必要となる。
- ⑤ガラから2本の糸を引き出し、②と同様にして撚り合わせる。
- ⑥仕上りの糸をヨシから糸とりカゴに入れるにも④と同じ方法を使う。
4. 3本撚りの糸はほとんど使用しなかった。
ギッチョについての伝承はない。

〔事例6〕 津久井郡藤野町名倉・相模湖町

1. 相模川でのアユ漁のための投網を自製していた。材質は絹で本報告からはずれるが、撚り具の形やその使用法に注意すべき点があるので記しておく。
2. フンドン……コマともいう。写真6のように竹の棒に木のおもりをつけたものだが、他に鉛や古銭を何枚か重ねてオモリにしている例もみられる。1人・屋外。
3. ①庭に事例4と同様の竹の台を2つ作る。縁側の柱を利用し、台を1つで行なうこともある。
 ②糸を2つ折りにして輪を台の横棒にくぐらせるか、または横棒に打ちつけたクギにひっかけて固定する。糸端は各々コマに結びつけもう一方の台に吊り下げる(図4-2)。台の棒を長くすれば、何人かが同時に行なうこともできる。
 ③コマを両手のひらではさんで、2つを交互にまわしながら2本の糸に撚りを与える。
 ④輪のところまで撚れたら、2つの糸端を片方のコマに一緒に結びつける。そのコマをまわして2本撚りの糸にする。
4. 3本撚りの糸は使用していない。

3

以上の事例から麻糸撚りの用具として① ツム、② 紡車2種、③ ギッチョ、④ ガラ・竹筒・ゼニバコ・ナコウドなどの補助具、をあげることができる。その一つづつについて気付いた点のいくつかを述べてみたい。

ツム(紡錘車)

1. 形態上の問題

ツムすなわち紡錘車は新石器時代から今日まで、世界各地で使用されてきた撚り具として知られている。ここでとりあげたツムも上部が鉤形になっている軸棒に、円盤型のはずみ車がついた形で、その間に構造上の大きな変化はないが、形状の上では若干の違いがみられる。試みに日本の弥生時代の紡錘⁽²⁾と、ここでみたツムとを比較してみると、第1に材質が異なる。石、土器片、骨などに対し、今日のはすべて木製である。第2にはずみ車の形が円盤形に加えて独楽型(円錐型)がみられるようになった。第3に重くなった。出土品と使用中のものとの比較に問題はあるが、例えば唐古出土の紡錘が22~36⁽³⁾gに対し、今日のは図10にみるように50~270gである。これらを技術上の変化としてとらえてよいものか、またその変化をどうとらえたらよいのかは、考古学の成果を中心とした他の多くの資料の検討を待たねばならないが、網糸用のツムについては、漁法の発達のため撚りの強い、丈夫な、太い糸への要求が出たこと、そのためには重いツムを必要としたこと、そして重いはずみ車による回転運動を容易にするには円盤型より独楽型の方が適しているであろうこと、独楽型への移行には木地師の技術の普及との関連を考える必要のあることを指摘できるように思う。

ツムの重さについてもう1点留意しておきたいのは、ツムにいろいろな重さ、大きさのものが併存することである。先にみた弥生時代の紡錘も今日のそれもその点では同様で、

それが撚り糸の太さに関係していることは容易に推測でき、また従来も推論として出されているが、事例でみたシタヨリとウワヨリでツムの重さを変えていること、小田原の例ではシタヨリのツムが⁽⁴⁾175gであるのに対し、ウワヨリのツムは270gであることを、ツムの重さと撚り糸の相関々係を占す資料としてとらえておきたい。

またツムの形状上の変化を考える時、事例6でみたフンドン（コマ）が注意をひく、現在川や湖の漁のみにみられ、漁村での事例がないが、竹の軸棒に木、鉛などをはずみ車としてつけたもので、ツムの一種であることに違いはない。このフンドンを鉤をもつツムの原型あるいはそれに先行する型として考えるべきなのか、または川漁で絹糸を使用するにあたり、ツムを改良あるいは応用した型として考えるべきか、現時点で明確にすることができないが、問題点として提出しておきたい。

2. 使用方法について

事例にみられるツムの使用法は次の3つである。

- (1) ツムを横におき、手または木片で軸棒に回転を与える（図1-1）。
 - (2) ①の方法で回転させてから、右手でツムを吊り下げ、回転を持続させる（図1-2 ①→②）。
 - (3) ツムを縦に吊り下げ、両手のひらで軸棒をはさんで回転を与える（図1-3）。
- いずれも古くから知られている方法で、使用法には大きな変化がみとめられない。⁽⁵⁾

紡車

紡車にはA型、B型と名付けた2種類の形がみられる。B型は今のところ横浜の子安だけの事例であるが、A型は県内各地に広くみられる。

1. 紡車B型

B型は普通「糸車」と呼ばれ綿糸を紡ぐ用具として近世初期に普及したといわれているもので、子安でいつ頃から麻糸撚りに使われ始めたのか明らかでないが、テツムについての伝承が全く聞けないことからかなり早い時期であったことがうかがえる。いずれにせよ紡車B型は近隣農村の、あるいは子安内での木綿づくりの糸車の転用として考えてよいであろう。そして紡車A型が県内各地に普及した時期には子安ではすでに糸車が使われていたため型を受入れることがなかったと思われる。

2. 紡車A型

県内で使われはじめた時期は、明治末から大正初期の頃で、各地で差があまりない。

このA型はB型のように他の繊維に使用されていたことも、織糸用麻撚りへの使用例も聞かない。また小型のツム2本を車で回転させて2本の糸を同時に撚れる構造になっていることから、当初から2本撚りの糸を作るための用具として考察されたものと考えてよいであろう。県下に普及した明治末にそう遠くない時期に考案され、かなり早い速度で普及した、漁村独自の麻糸撚りの用具として位置づけておきたい。その導入経路や全国の漁村にみられるものかどうか今後の調査を待ちたい。

使用法はシタヨリの場合は、糸端をツムに結び1人が首から下げた箱に糸を入れ後退し1人が車をまわす、という形でどこでも共通しているが、ウワヨリの場合には、シタヨリに使った紡車で行なう方法と、もう1台紡車を加えて行なう方法とがある。紡車2台の

使用は、シタヨリした糸にもう1度撚りを加えながらウワヨリをすることになり、1台の場合より撚りの強い糸ができること、糸固定の方法、など事例4でみた「3本ヅム」の方法との類似性が指摘できる。この紡車2台による2本撚りの方法を応用して、ツムを3本もった紡車を使って3本撚りをする形が事例2にみられた。

ギッチョ

3本撚りにするには、3本の糸を同時に撚り合わせるか、2本撚りの糸に1本を撚り合わせるか、が考えられるが、前者として上にみた事例2の紡車2台の使用による方法、後者としてギッチョがある。ギッチョは3本撚りの糸を使う地域すべてにみられる。撚るというより糸を巻きつけていく方法だといえよう。

補助具

補助具には次に記すようにいろいろな種類があるが、特徴的なのはシタヨリ（撚る）からウワヨリ（撚り合わせる）に移る手順を手ぎわよく行なうための工夫と用具である。紡車A型の場合ははじめから2本のツムをもち、撚り合わせるための用具として考えられているのでよいが、ツムの場合は1本づつしか撚れず、しかも糸がツムに巻きついた状態で撚り上がるため、糸を他へ移しかえる手間と、ウワヨリの時2本の糸を同時に引き出すための工夫が必要である。その方法として各地に共通してみられるのが竹筒の利用で、竹筒のまま、またはガラという形で使われている。この糸の移しかえの手間を省いて、はじめから糸を固定しておく形として、「3本ヅム」（事例5）を考えることができる。以下補助具をあげると

1. 回転の台と木片

東北地方などでテシロギ、ツムジダイなどと呼ばれているツムに回転を与える木と台であるが、調査地では名称不明。膝と手⁽⁶⁾によっても行なわれた（事例1, 2, 3）。

2. ガラ

竹筒2つの糸巻き（事例1, 2, 5）。

3. 竹筒

長さは20cm位で太さはいろいろなものを用意する（事例3）。

4. 竹の台

3本ヅムやフンドンを吊り下げる台（事例4, 6）。

5. ナコウド

実物資料がないので形状、寸法は明確でないが、糸を2本または3本撚り合わせる時に糸調子を加減するために使う。2本撚りの時は竹の棒、割箸そして指（事例2, 3, 4）。3本撚りの時は3つの筋のついた竹または木製のもの（事例3）。紡車A型と「3本ヅム」の時に必要とする。

今までみてきた撚り具とその方法を、とくに漁業用糸の中心である2本撚りの方法についてまとめると次のようになる。

型	指標	撚り具				補助具			事例	
		撚り具	本数 台数	シタヨリ、ウワ ヨリの使い分け の有無	ツムの 使用法 (P27)	糸の繰 り出し	ツムの 固 定	糸の調整	No.	地 域
A 1			1	×	(1)	ガ ラ	×	×	2	三浦
A 2		ツ ム	1 (3)	○	(2)	ガ ラ 竹 筒	×	×	1 3	逗子 大磯
A 3		(フンドン)	3	○ (ハナツムと シリツム)	(3)	×	竹の合	ナコウド	4	小田原
B		紡車B型	1	×	—	ガ ラ	—	×	5	横浜
C 1			2	×	—	ゼニバコ	—	ナコウド	2, 3	三浦 大磯
C 2		紡車A型	2	○ 1本ツムと2本ツム ハナグルマとシリグルマ	—	ゼニバコ	—	ナコウド	4	小田原
				○ (1本ツムと2本ま たは3本ツム)					3	大磯

(A, Cの1と2はシタヨリとウワヨリで撚り具を使いわけるかどうかにより, またA1・2とA3とはツムの使い方て区別した。)

すなわち,

- ①麻糸撚りの方法として表にあげたA1, A2, A3, B, C1, C2の6つの型をあげることができること。
 - ②全体としてツム(A)から紡車(B, C)への発展をたどることができること。
 - ③地域的にみると, A1, A2, C1が三浦, 逗子, 大磯, 葉山, 千葉富津, 館山⁽⁷⁾など東京内湾, 三浦半島および半島よりの相模湾にみられるのに対し, A3, C1⁽⁸⁾は大磯, 二宮, 小田原⁽¹⁰⁾と伊豆半島よりの相模湾にみられることが指摘できる。
- さらにこの①～③の組合せからⅠ～Ⅳの4つの型とそれに対応する地域が設定できる。

型	地 域	事 例
Ⅰ	A1, A2, →C1	東京内湾, 三浦半島, 半島より相模湾沿岸
Ⅱ	A3 → C3	伊豆半島よりの相模湾沿岸
(Ⅲ)	A2 → C1; C2	ⅠとⅡの中間地域 —— 大磯
Ⅳ	(A) ……→ B	横浜市子安

これが神奈川県的事例にとどまるか, または麻糸撚りの型として考えてよいのかは今後の他地域の資料の検討に待ちたいと思う。

なお, 3本撚りの方法については事例紹介にとどめ, 後日に稿を改めて報告したい。それは今回ツムを中心としたため1本釣や延縄を漁業形態とする地域が対象になり, 大規模

な網漁の地域の事例が欠けた。そのためツムでは撚れない太い糸＝縄の撚り方にふれることが出来なかった。それらの地域では縄撚り＝3本撚りをナコウド、メガネ、ギッチョなどという用具を使って行っており、3本撚りの方法を考える上でその考察は欠くことができないと思うからである。

5

最後に、漁村における麻糸撚りの特徴について若干ふれておきたい。

従来、麻糸撚りについて報告されているものは織糸用の事例で、多くは語彙だけで使用方、用具の形状、大きさ、などが欠けているので明確ではないが、テツム、テシロギ、ヒザギなどを使っての——ここでいうA1またはA2の方法と考えられる。それとの比較から

- ①紡車A型の存在。 織糸の撚りが専らツムによっていたのに対し、明治末と近年ではあるが、独自の撚り具を生んだこと。
- ②補助具の多様さ。
- ③3本ツムの方法。 ツムの使い方、ツムと糸固定の方法、屋外で多人数で行なう点など独自の方法と思われること。

が相違点として指摘できる。

その理由として第1に衣料としての麻が東北や各地の山村を除いて近世初期以降木綿にとってかわられたのに対し、漁具用の糸に木綿が使われはじめたのは明治末以降のことであり、それまで専ら麻が使われていた。この使用年代の差違があげられよう。第2に衣料としての麻が自給衣料用に女の片手間の仕事であるのに対し、網糸は漁業という生業を支えるに欠くことの出来ないもので、漁師は暇さえあれば麻糸を撚っていたといわれ、その生活に占める比重の違いが、作業能率化への要求度の違いとして影響を与えていたと思われる。第3に織糸用の撚りが「織る」ための前段階として多くは片撚り（シタヨリ）であったのに対し、網糸の場合は2本撚りという安定した撚りの形が常に求められていたという技術上の問題をあげることができる。従って、常に「撚る」と「撚り合わせる」の2つの作業が必要であって、この違いが多様な補助具や紡車A型そして3本ツムの方法などを生んだといっていよいであろう。

以上漁村における麻糸撚りの技術の多様さを衣料としての麻糸撚りと比較しながら、漁村の、そして網糸、釣糸のもつ特性としてとらえてきたが、地域的に限られた少ない事例から、しかも、衣料としての麻糸撚りについての資料をほとんど検討しないままに論を進めた。1人よがりや誤認が多いと思う、多くの方からの御教示をお願いしたい。

なお、図版、写真に使用した資料は館蔵品、実測図は館員の長田平氏によった。

註

- (1) 「民俗学と技術史との関係」(「日本民俗学会々報」22, 1961)や「民俗学と技術史との関係について」(「民俗」41, 相模民俗学会 1960)などで桜田勝徳氏が常に説いておられる。
- (2) 太田英蔵「紡織具」(「日本の考古学Ⅲ」・河出書房・1965)

(3) 注(2)参照

(4) //

(5) 「信貴山縁起続巻」や「和国百女」などに使用法(2)に対応する撚り方の図がある。

またエジプトの出土品には(1)(2)(3)に対応するツム使用の図がみられる(「紡績」・技術の歴史2・筑摩書房・1962)。

(6) 「総合日本民俗語彙」1962

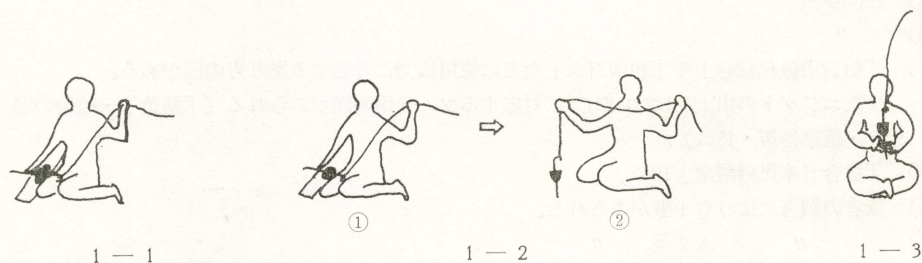
(7) 筆者の調査によりC 1型がみられた。

(8) // A 2型 //

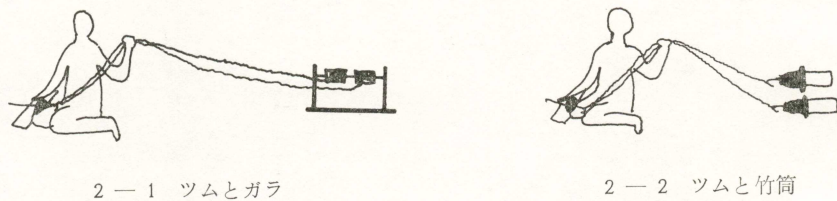
(9) 「日本の民具」2(慶友社・1965)に紡車A型の写真がある。

(10) 筆者の調査によりC 3型がみられた。

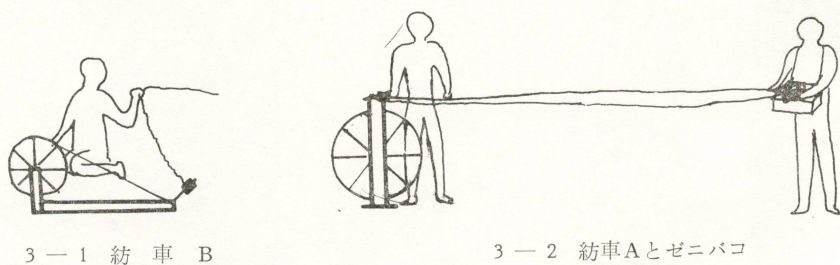
(11) (7)参照。他に東北を中心に断片的な報告があるが省く。



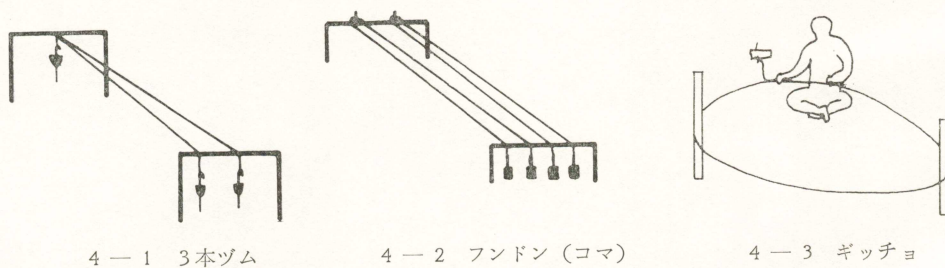
1. ツムの 使用 法



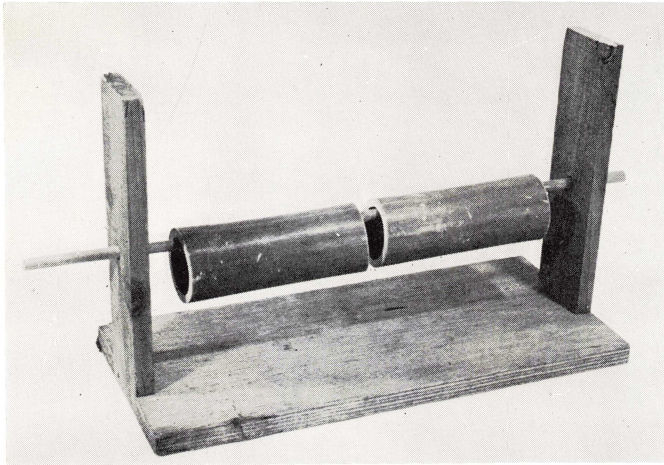
2. 2 本 燃 り の 方 法



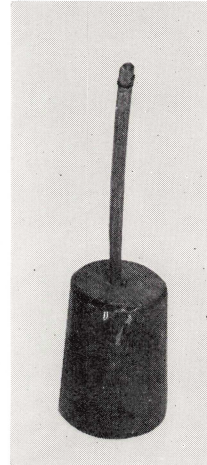
3. 紡 車 の 使 用 法



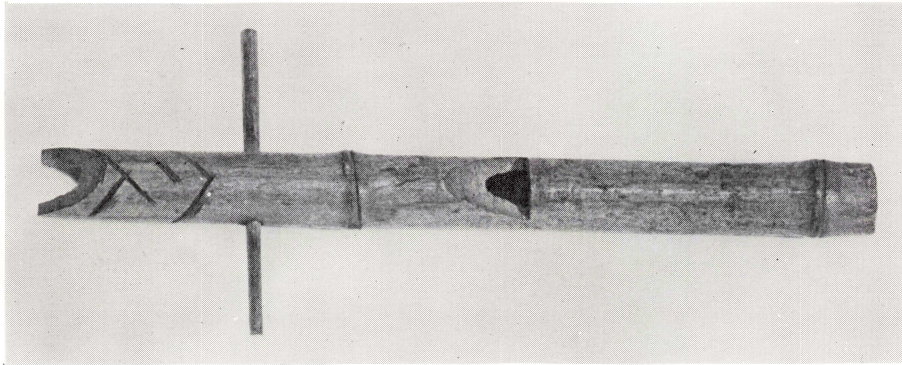
4. 糸 の 固 定 の 方 法



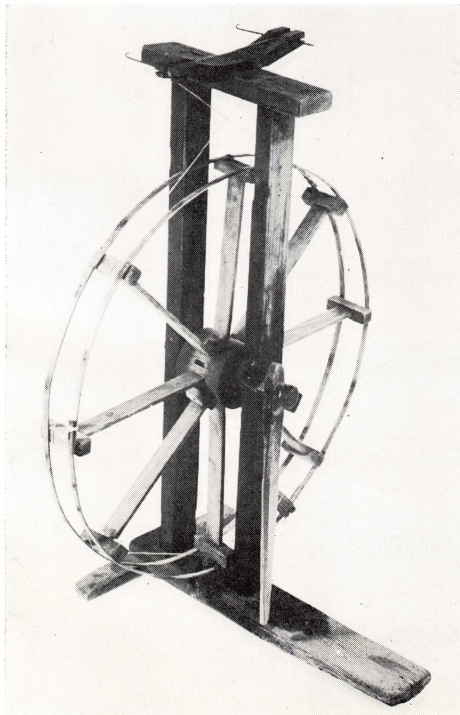
5. ガラ 横浜市子安浜 高35cm



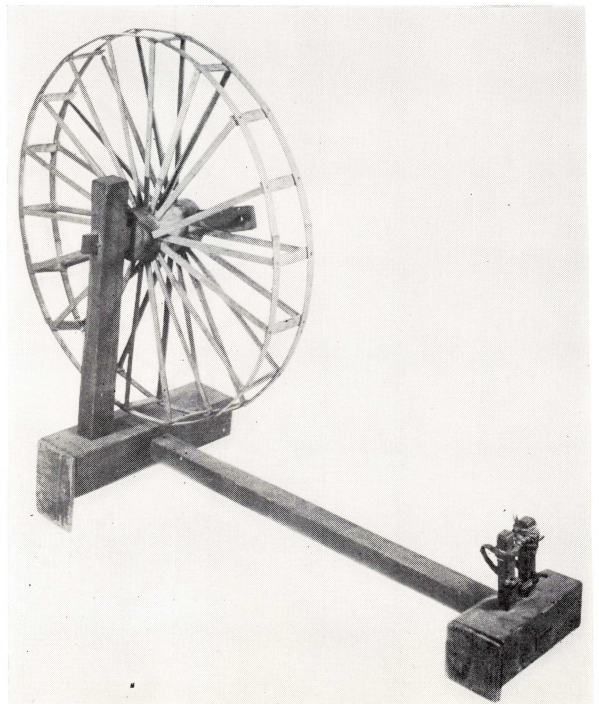
6. フンドン 相模湖町 全長20cm



7. ギッチョ 小田原市 全長27cm

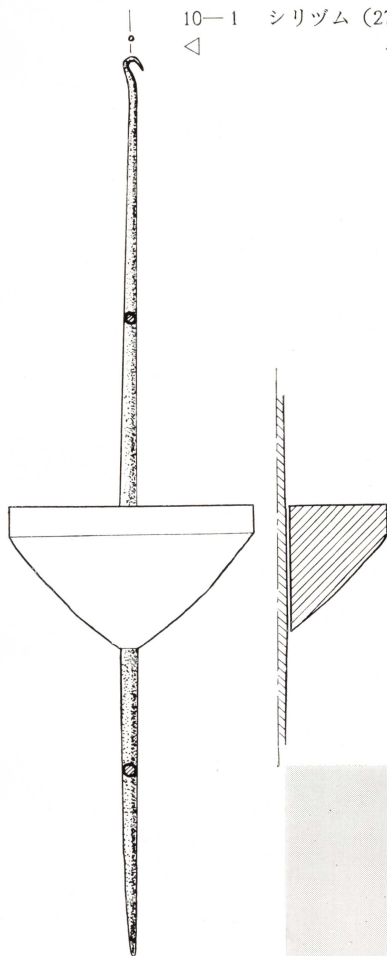


8. 紡車A型(ガラ) 葉山町 高105cm

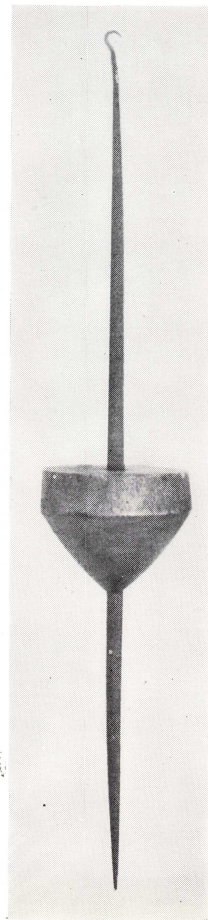
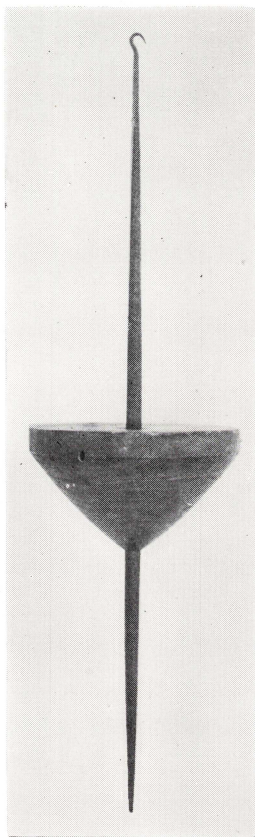
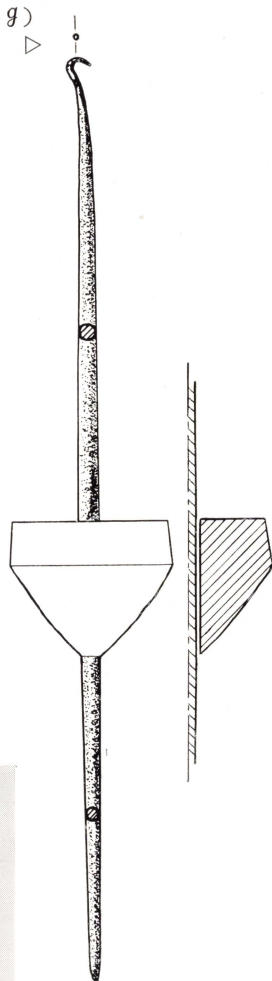


9. 紡車B型 横浜市子安浜 高75cm

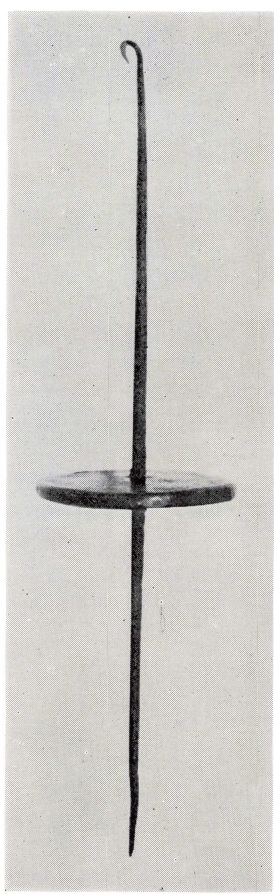
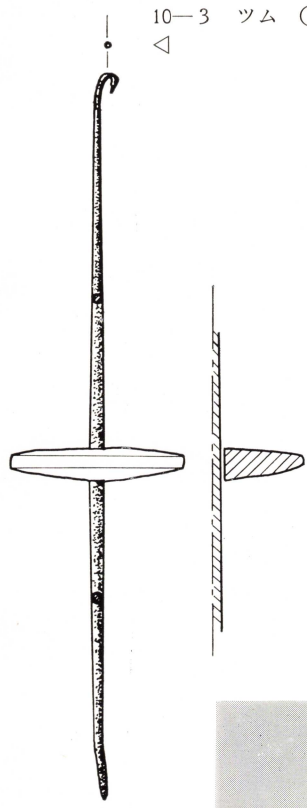
10-1 シリヅム (270g)
△ 小田原



10-2 ハナヅム (175g)
小田原 ▷



10-3 ツム (50g)
 逗子市



10-4 ツム (70g)
 大磯町

